



モンゴル野球交流体験記

阿南市野球指導者 大和利弥さん（領家町）

草の根の国際交流ということ、岩浅市長を団長に21人の訪問団で関西国際空港から北京経由でウランバートルのチンギスハーン国際空港に向かった。機内から見下ろす大地は、広漠たるゴビ砂漠と大海のような草原が広がっていた。そこでは、大陸の広さを実感しながらモンゴルでの交流がどのようなのか心の中で想像をふくらませていた。空港では、モンゴル野球連盟の理事長さんと通訳のツオロモンさんの歓迎を受けた。モンゴル人の姿形は日本人とよく似ていて、とても親近感を感じた。空港から市街地までの道では、広々とした草原と牛や羊、馬の放牧も見られたが、それより建設中の建物や道路の舗装整備が目立っていて、まさに建設ラッシュ中であった。これから街の様子もどんどん変わっていくように感じた。



朝の気温は15度前後で、その日もすがすがしい気候だった。バスで国立野球場に向かうと、約100人のモンゴルの子どもたちが整列をし、横断幕を広げて歓迎してくれた。野球教室は、元気のいい挨拶で始まった。ランニング・体操の時も覇気のある掛け声であった。少年選手たちは大学生や上級生の指示に従い、規範意識をしっかりと持ち練習に参加していた。まずはキャッチボールから、グローブとボールを持つとモンゴルの子どもたちはさらにやる気が高まっていた。投げ方や捕球の仕方等、細かいアドバイスにはとても意欲的に反応してくれた。また、(株)アスリートジャパンから元阪急ブレーブスの大熊さんと元日本火腿ファイターズの西崎さんが駆け付けてくれた。その夜の懇親会では、たくさんの交流関係者と親睦を深めることができた。日本からの留学生は冬の寒さの厳しいこと、映画に出演したオトゴさんはもつと交流を深めたいなど。また、次の日の大使館訪問では、清水大使から「今まで数々の支援をしてきたが、見返りのない支援はしてはいけない。最後の仕事に医科大学の設立を考えている。」という夢のある言葉を聞いて、この交流に参加した意義を感じた。

